

『文章読本』のすゝめ

早川 浩
(株式会社早川書房代表取締役
 社長・慶應義塾理事・評議員)

論文と散文は違うものだが、文字を使って相手を説得し、楽しませるという点では趣旨は共通している。応募作のなかには読む者の存在を忘れ、いささか独りよがりのものも見受けられた。ではどうやつて読者を惹きつける文章を書くか。高校生諸君にはぜひ、谷崎潤一郎や三島由紀夫、丸谷才一が著わした『文章読本』の一読を薦めたい。(全て中公文庫刊)。

なかでも私の推薦本は、小説、評論、翻訳、随筆など幅広い分野で活躍した丸谷の著作である。氏は文章上達の秘訣は「名文を読むことだ」と断言する。漢文や『源氏物語』、夏目漱石や森鷗外などの和書漢籍から先人の語彙、言いまわし、修辞技法を蒐集して、自らの文章を織るための糸とすべしと説いている。頭の中の引出しがたっぷりと余裕のある若者に

は、是非とも励行して欲しい金言である。さて、小泉信二賞を受賞した稻垣さんの「『文学は社会の役に立つか』と問う社会を問う」は、ますなによりも課題自体を鵜呑みにせず疑問を呈する姿勢に感心した。何事も当然のこととせず批判的神を持つことは社会に出ても大事なことだ。文学の価値を人間の歴史や自分の経験を交えながら整然と論じている点に好感が持てるし、文学の価値を肯定するという強い意思が行間から伝わってくる。ただ、相対する「科学」に関する考察の掘り下げ方が充分でなく、まとめが抽象論に終わっているのが惜しいが、才能を發揮できる土壤を持つていると見た。

次席の鷺山さんの「『家族』を拓く」は、映画『東京物語』『男はつらいよ』『万引き家族』に見る家族の形から、「未来の家族」の在り方へと思考を進める。論の運びが滑らかで楽しく読めた。若い人は文学にかぎらず、溝口健二、五所平之助、小津安二郎、黒澤明が撮った往年の名画もぜひ観てほしい。映画は一国の文化であるから。

佳作入選の佐藤さんの「家族と延命治療について」は、重い題材と真正面から取り組んだ作品だ。ただし、亡くなつた祖父の話から延命治療への持つて行き方が強引で主題が「家族」からいつの間にか「延命治療」にすり替わつてしまつていて、早坂さんの「平成最後の高校生にとつて『学問のすゝめ』は有用か」は、高校一年生にして同書を読みこなして、現代における有効性を考察したその意氣や良しだ。丹念に調べた様子も見られ、真面目な書き方もよろしい。尻すぼみになつてしまつた結論を充実させればよりすつきりした論文になつた。

宮下さんの「現代日本における『市民のあり方』」は、文系より理系の方が「頭が良い」という価値観を生んだ現代日本社会を考察する切り口が面白い。理系学科は全科目が密接に結びついており、いったん苦手になると遅れを取り戻すのに時間がかかるとの分析にも説得力があつた。

そうそう、丸谷才一の『文章読本』にこんなことが書いてある。古典や漢文など文章・詩を読み込んでいないと難しい高等な技であるが、論文を書くうえでも大切な姿勢なので紹介する。

「文章はちょっとと気取つて書け」。